

フレーミング現象とは何か？

—心や体に染み付ける情報モラル学習—

近年、青少年による凶悪事件の発生がしばしば注目されている。本年でも6月、小学校6年生の女子児童が同級生の首にカッターナイフで切りつけ、死亡させるという事件が起こった。加害者と被害者の児童は、インターネット上のやり取りの中で人間関係を悪化させており、それが犯行のきっかけとされたことから、インターネットに関する悪影響論が沸騰した。

インターネットのようなコンピュータ・ネットワーク（以下、ネット）上でのやり取りが人間関係を悪化させることは、1980年代の半ばには指摘されており、研究対象となってきた。

テキスト情報のやり取りを主とするネットでは、相手の表情、声色、抑揚、しぐさなどが分からないので、メッセージの送り手は、相手の感情の変化などを感じ取れずに無遠慮な発言をし、一方、受け手のほうも、情報に限りがあるために、もともと無遠慮なメッセージの内容をさらに悪く解釈してしまうなどして、罵り合いが生まれ、人間関係を非常に悪化させていく場合があり、それをフレーミング現象と呼んできた。

しかし実は、実証研究の結果は、この現象がそれほど起こるものではないこと、とくにユーザーが相手のことをよく知っている場合にはあまり心配ないことを示してきた。ユーザーは自ずと、こうしたネットの問題を感じ、対応しているのである。とくに相手のことをよく知っている場合には、メッセージの送り手も受け手もそれだけ適切な意思疎通が可能であり、ネットにおける制約は問題になりにくい。

今回の事件については、加害者と被害者は友人であったので、フレーミング現象が起きにくい状況であったようにも見える。しかし、1つ考慮しなければならないのは、これまでの研究は、大学生など年長者を中心に進められてきたことである。年長者であれば、ネットの特質に対応して行動することも可能であろう。

実は、小学生についてはこれまでに全く研究がなく、この問題が小学生についても心配ないと言えるかどうかは現時点では分からない。小学生がネットを用いるようになったのはごく最近であり、そのため、小学生は従来、研究の対象として想定されなかったからである。それゆえ、今回の事件でフレーミング現象が起きた可能性は今のところ否定できない。今回の事件は、小学生に対する研究の必要性を強く示唆しており、その点でも注目される事件であったと言える。

小学生の場合、ネットが対面に比べてどれほど問題であるかは、今後の研究によって明らかにされるべきことであるが、いずれにしても、問題が全くないことはあり得ない。年長者の場合でも、フレーミング現象は、とくによく知らない人の間では起こる場合があるのである。

したがって、ネットには、フレーミング現象を引き起こすような特質があることを理解

させ、それを起こさないように行動する方法と姿勢を、子どもに学習させることは重要である。

そして、とくにこうした情報モラルに関することは、知的に学ばせるというよりも、心や体に染み付けるほうがよいと思う。自分の安全を守ることや、人に迷惑をかけないことは、生活上のもっとも基本的な素養であると考えからである。歯を磨かなかつたり、トイレから出るときに手を洗わないと気持ちが悪いように、情報モラルを守らないことに対して自然に嫌悪感が生じるのが望ましいように思われる。心や体に染み付けるためには、幼少時からの学習が重要であるであろう。歯磨きや手洗いはその賜物であろう。こうしたことから、私自身は、年少期の情報教育では、情報モラル学習がとりわけ重視されてよいと考えている。